



▲患者の体に開けた穴に3本のアームの先に付いた鉗子を挿入した状態。青い光は安全に作動している状態を表す。黄色いマットの上がおむけに寝ている患者の頭部



▲操作台に座り、拡大された高解像度3次元立体画像を見ながら、両手で3本のアームを遠隔操作する医師。二人の医師の目で手術状況を確認しながら、共同作業や指導、監督を行うことができる



▶ダヴィンチsiの全体図。コンソールと呼ばれる2台の操作台(右奥)、腹腔内観察用3Dカメラと3本のアーム(中央)、助手や看護師のためのモニター(左の三つ)から構成される



九州初 最新型手術支援ロボットが稼働

熊本大学医学部付属病院

最新型内視鏡手術支援ロボット「ダヴィンチ si」を使った前立腺がん摘出手術。3本のアーム(右)の先に付いた鉗子は人間のように関節があり「手」のような動きを再現できる

熊本大学医学部付属病院(熊本市中央区本荘)は、最新型の内視鏡手術支援ロボット「ダヴィンチ si」を6月から稼働した。昨年からの保険適用となった、前立腺がん摘出手術で使用している。

最新型は九州初導入。ダヴィンチはアメリカで開発され世界的に導入が進んでおり日本では全国で約120台、そのうち今回の最新型は約30台導入されている。

手術では、体に開けた小さな穴に3本のアームの先に付いた鉗子(かんし)と呼ばれる器具とカメラを挿入し、医師2人が2台の操作台でアームを遠隔操作。ハイビジョン3D画像で患部を見ながら2人で共同作業したり、熟練者による指導などができる。開腹手術に比べ痛みや出血が少ないため早期の退院も可能だという。また、従来の内視鏡手術に比べて、鉗子が人間の手と同等以上の可動領域があるため柔軟で複雑な動きが可能。鉗子の先は人の指より小さく、骨盤奥などの手が入りにくい部分にも届く。医師の手ぶれを自動的に補正し極端な動きを防止して安全性を保つほか、医師の手の動きを鉗子に縮小して伝え、非常に繊細な手術をすることができる。

韓国定期コンテナ航路が週3便に

14年ぶり増便、長錦商船(ソウル市)が土曜入港 **八代港**



雨の中、八代港に初入港する長錦商船の「シノコーマサン号」(3597トン)。6月1日

八代港と韓国・釜山港を結ぶコンテナ定期航路が6月1日から、これまでの週2便から3便体制となった。同航路は99年に韓国の高麗海運(株)と興亜海運(株)の2便が就航、以来14年ぶりの増便。

就航したのはソウル市の長錦(シノコー)商船(株)で、土曜に入港する。船は水曜に釜山を出港後、下関、門司、細島(日向市)の各港を経て毎週土曜に八代に入り、釜山に戻るスケジュール。八代市商工観光部重点港湾八代港営業隊では「同船ではこれまで博多や

門司で降ろしていた荷物を八代で降ろすケースが増えている。陸送コストの削減などメリットを感じている荷主は多いようだ」と話している。

6月1日には同港で歓迎式典があり、関係者ら約40人が出席。八代港ポートセールス協議会会長を務める福島和敏市長は「3便化による競争で運賃が下がり、新たな需要の掘り起こしにつながる。現在博多港に向かう積み荷を八代港に戻すためにも新たなガントリークレーンの設置が必要」とあい